

●外交時評

華国鋒体制の矛盾

中嶋嶺雄(東京外語大学助教授)



なき毛沢東主席は、ほぼ二十年近くも公開の演説をおこなわなかった。文化大革命以来の十年間は、非公開演説さえほとんどなされなかった。そのかわり、さまざまな断片的な発言や指令が「最高指示」ないしは「毛主席語録」として伝達され、中国内政の方向を規定してきたのである。

これに対して、華国鋒新主席はさる十二月二十五日、「農業は大業に学ぶ」第二回全国会議で長い演説をおこない、その内容はすぐに発表された。

華国鋒主席はこの演説のなかで、「一九七七年の全党、全軍、全国各民族人民の主な戦闘任務はなんであろうか」と問いかけ、「まず第一に『四人組』を摘発、批判する偉大な大衆運動を深化することが、一九七七年の中心任務である」とこたえて、「四人組」との矛盾は、敵と味方の矛盾である」と位置づけた。やはり「四人組」問題が内政上の最重要課題なのであり、この問題を処理して、一九七七年を「天下大い

に治むる年」にしたいというのが華政権の当面の願いであろう。

それだけに、「四人組」にたいする非難・攻撃の言葉はますますどぎつくエスカレートしており、その半面、華国鋒主席への英雄崇拜の傾向が顕著になっているが、しかし、依然として華国鋒体制は、党中央委員会や党大会などによって制度的に認知されておらず、「四人組」を打倒した北京政変の手続き的な根拠を、説得的に説明するための根拠づけに悩んでいるようである。

たとえば、「張春橋、江青、姚文元の醜悪な経歴は、彼らがもともと蒋介石国民党反動派と切っても切れない数々のつながりをもっていたことを示している。……王洪文は、新しく生まれたブルジョア階級の典型的な代表である」とする華国鋒演説にもかかわらず、たとすれば、彼らが推進した文化大革命とはなんであったのか。王洪文を「老・中・青」三結合のエースとして登場させた十全大会(一九七三年)は、それでは「ブルジョア階級の典型的な代表」を一

躍、党副主席に選んだ醜悪な大会ではなかったか。江青夫人はなんといつても、毛沢東主席が延安時代以来三十年以上もつれそつた最愛の妻ではなかったのか。そういった素朴な疑問に合ったとき、右のような説明は、たちまち根拠を失ってしまうであろう。

いかに「四人組」が大衆から浮き上がった存在であったにせよ、事件の本質は一種の「予防クーデター」であり、極限状況においては、華国鋒体制の側に「ルール違反」があったことは否めない。

この点は、「人民日報」編集部論文「滅亡寸前の憂気のあがき——『四人組』の毛主席「臨終遺囑」ねつ造の大陰謀を暴露する」(『人民日報』十二月十七日付)を読めば読むほど明白になる。

それによると、「四人組」の陰謀とは要するに「既定の方針にしたがって事を運ぶように」との毛主席「遺囑」をねつ造した「四人組」が九月十六日にそれを公表して以来、あらゆるメディアを動員してこの「遺囑」を広め、中央弁公室の名前で「四人組」と地方幹部のバイブを強化し、殺人計画さえ立てて、権力を奪取しようとしたというのである。

そこで、十月四日付「光明日報」の梁劭署名論文「永遠に毛主席の既定方針にしたがって事を運ぼう」は、「四人組」の最終的な反党行動の意思表示であったが、実は、このほかに「毛

主席の既定の方針にしたがつて勇躍前進しよう」との反党論文が、十月八日付「人民日報」に予定されていたのだという。
結局、十月七日に「四人組」は一網打尽にさ

れ、華国鋒氏が同じ日に党中央から主席に任命されたのだが、こうして経緯は、一方で、事態の本質が「華国鋒のクーデター」であることを明らかにしている。

◆
この辺の事情をどう説明してゆくのが、鄧小平問題とともに、当面の華国鋒体制の課題であろう。

現代に とって 司馬遼太郎とは何か？ 歴史を描いて現代を語る作家の一断面

「へ花神」をハナガミと読むヤツがいるんですよ——とNHKのディレクターが苦笑していたそうだが、これは昨年のこと。東京・九段は靖国神社前で、ハトにフンをひっかけられながらたたずんでいた大村益次郎の像が、いまや、若き日の村田蔵六としてブラウン管によみがえり、大河ドラマ「へ花神」の主役で活躍していることは周知のとおり。そして原作者、司馬遼太郎氏の盛名いよいよよ上がるばかりである。ブームに乗る司馬遼太郎とは、現代にとって何なのか……。

書けば必ずベストセラ―

司馬遼太郎氏は現在、最も多忙な作家である。とにかく、この作家に会うのは容易ではない。記者は昨年暮れ、どうしてもインタビュ―をしなればならない必要に迫られ、再三再四、電話や手紙で申し入れた。ついでにいえば、初対面ではない。前に一度、インタビュ―をしている。が、約束はなかなかとれなかった。というより、そのつど、夫人に謝絶されたのである。

記者はやむなく、東大阪の司馬邸へ押しかけた。電話や手紙では明きそうにないラチを、直接交渉で明けてみようとしたわけだ。司馬邸を訪ねたが、予想通り「玄関払い」。しかし引き下がるわけにはいかない。夫人に哀訴嘆願。「ではとにかく、取り次いでみましょう」というまでにこぎつけた。やあ、キミか。
——やあ、キミか。
かくてインタビュ―はかなった。が、このとき
の司馬氏の説明……。

——忙しいといっても、いつも原稿を書いているわけではない。ぼくはそれほど書いてはいないのだ。ただ、人より少し多く、歴史の本や史料を読んでいる。忙しいというのは、そういう調べる時間のことなんだ。その作業を中断したくないのや。

この作家ほど文献、史料を読みあさり、自家兼籠(ろう)中のものとしている人はいまい。サンケイ新聞社を辞めたとき、退職金のすべてを注ぎ込んで坂本竜馬の関係文献を集めたと聞く。その後の文献収集はおびただしいものがある。司馬氏の書庫は文字通り「汗牛充棟ただならず」なのだそう。そして、その文献から生まれる作品群だが、書けば必ずベストセラ―なのである。

信者は中間管理職層

本の取次店の大手、日販は毎週、ベストセラ―